

1

a
創 設

b
収 集

c
自 明

2

生 ぎ ー た め

3

I
ア

II
イ

III
エ

4

勉 強 す る

5

A
舌

B
ド ル

C
し

6

(記述題)

7

じ っ ー こ と

(完答)

8

8

9

寛 容 ー き る

10

連 想 す る

11

イ

(完答)

2

1

a
表 札 (標 札)

b
加 減

c
体 勢

2

I
エ

II
ア

III
オ

IV
イ

3

A
っ

B
け

C
ぶ

D
単

4

ウ

5

イ

6

ゴ ー ル

7

お ー ク ー こ ー 戦

(完答・順不同)

8

エ

9

(記述題)

10

(記述題)

1

6

フ イ ー ル ズ 賞 を 受 賞 し、非 常 に 高 学 歴 で、名

だ た る 大 学 の 教 授 を 歴 任 し て い る 点。

(同意可)

2

9

風 馬 に 対 す る い じ め や 学 校 に 不 要 な も の を 持

っ て き た こ と な の 悪 い こ と を し て い な が ら

、 風 馬 を つ き 飛 ば し た か ら。

(同意可)

10

仕 返 し し た か っ た は ず の 箕 浦 に ゲ ー ム ソ フ ト を 返 さ な け れ ば

な ら ない 理 由 を 風 馬 が 話 さ ない こ と。

(同意可)

〔配点〕	
1	1
6	5
2	2
9	1
10	3
各 4 点 × 14 //	56 点
各 6 点 × 3 //	18 点
各 2 点 × 13 //	26 点

①

- 1 a 「創設」は施設・機関などを新たに設立すること。b 「収集」は何かを集めること。同音異義語「收拾」と確実に区別しよう。ちなみにどちらの熟語も一字目は「収」である。一字目と二字目を逆にしないこと。c 「自明」は証明するまでもなく明らかなこと。
- 2 本文の真ん中あたりで、「私たちが学ぶのは、生きていく上で必要な『知恵』を獲得するためのですね」とはつきり述べている。
- 3 I：「いまになってみると」の言いかえが「大人になってみると」なので「つまり」が入る。II：大人になってみてわかったことの例があとに書かれているので「たとえば」が入る。III：「知識の量では、人間はAIにかないません」↓でも↓「AIには知識はあっても知恵はありません（知恵という点ではAIは人間にかないません）」というつながり。
- 4 直後の段落の具体例に、中学生のときに勉強していた英語が大人になってから役に立っていることや中学校の教科書が「必要な知識を過不足なくまとめている」ことが書かれている。これはつまり「勉強することの意味」がわかったということである。
- 5 A 「舌を巻く」：感心する。B 「ハードルが高い」：乗り越えなくてはならない困難が大きいさま。C 「しきりに」：程度・度合いが著しいさま。
- 6 「そんなすごい人」とは広中氏のことであるから、その説明を字数内にうまくまとめる必要がある。まず要素を短く拾ってこよう。「フィールズ賞を受賞した」「京都市理理学部を卒業してハーバード大学大学院を修了」「コロンビア大学やハーバード大学、京都大学の教授を歴任」という三点になるだろう。
- 7 本文真ん中あたりに「こういうときに力を発揮するのが『知恵』なのです」とある。この「こういうとき」の説明が答えにあたる。
- 8 8は区切られた部分が上と下に二つあるので、外側と二つの内側の合計三つの部分に平面を分割できる。他の数字ではできない。
- 9 まず「そんなこと」が何かを確認する。「AI（人工知能）」が人間の能力を上回る日が来る」である。それが、「世界有数の数学者」つまり広中氏の「論」によると「ない」ということである。――線⑥のある段落のはじめに「人間の頭脳は、コンピューターと違って『知恵の広さ』があり、寛容性があるがゆえに連想することができません」とあるので、この内容にあたる二十字の部分を広中氏の文章の引用をさかのぼってさがすと、「寛容な思考態度をとることが人間にはできる」というところが見つかる。
- 10 直前にある「知恵の広さ」「寛容性」とともに、「連想する能力」は人間の能力の説明において関連づけて説明されていた。最もわかりやすいのは問9の解説で示した「人間の頭脳はく」という引用部分である。
- 11 ア「学ぶこと自体に意味はない」がおかしい。知恵を身につけるという目的がある。ウ「苦勞して知識を得ようとするのはナンセンスである」がおかしい。アと同じく広中氏は知識を得ようとする目的を示している。エ「負ける部分がない」がおかしい。「蓄えた知識の量や、世界中からシウシウしてくる知識の量では、人間はAIにかな」わないのである。

②

- 1 a 「表札」は「札」の部首に注意すること。「しめすへん」にすると「札」になってしまう。b 「加減」はこの場合適度に調節すること。「減」の形に気をつけよう。c 「体勢」はからだの構え方や心構えのこと。たくさんの同音異義語があるので注意しよう。
- 2 I 「のろのろ」：体調不良で、ゾンビのようなおそい動きをイメージする。II 「もやもや」：心がさっぱりしないさま。III 「ばたばた」：人が手足を激しく動かすさまを表す。IV 「じわじわ」：物事がゆっくりと確実に進行するさま。この場合ゆっくり近づいている様子を表している。
- 3 A 「つつけんどん」：無遠慮でとげとげしいさま。B 「けたたましい」：さわがしい。C 「ぶつそうな」：よくないことが起きるような危険な感じがすること。D 「單刀直入」：すぐに本題に入ること。
- 4 「不適當なもの」を選ぶことに注意すること。このタイミングではゲームソフトのことは頭にないだろう。エは直後の提案と同じだが、「いっぱいある」「聞きたいこと、言いたいこと」から一つを選んだ可能性もあるので、「明らかに不適當」とは言えない。
- 5 自転車で瀬戸内海を渡るなどという苦勞をして訪問するのに何も連絡していなければ、とんでもない無駄骨に終わる可能性もある。あらかじめ電話で連絡しておくべきだとコタが考えるのも当然である。だが箕浦に会いにきた目的は、ゲームソフトを盗んだことを告白し、それを返すことであるから電話であらかじめ伝えるのはなかなか難しいことだろう。「連絡しなかった」↓「なぜ？」となってもややこしいだけなので返答しなかったと考えるのは妥当である。また、「チャリにまたがった」ということから次の行動に移ろうとしているので、次にどうすべきかは風馬の頭にはすでにありそうである。
- 6 「前半のゴール。もしかして風馬は、この町のだれかに会いたかったとか？」から、コタの頭の中で箕浦が「ゴール」と結びついたことが読み取れる。
- 7 この一連の行動をしている間に表現している部分がある。「おれ流のイカク」も「こけおどし作戦」も相手を恐れらせようとしている行動である。
- 8 あとの方で「どうりであいっら、すぐには逃げなかったわけだ。あいっらにとって悪いのは、風馬のほうだから」とある。
- 9 「もとはといや箕浦が悪いんじゃない。不要なもん、学校に持ってきたやがって」「仕返しされてとうぜん」「あいつ、風馬のことをつき飛ばしたじゃんか。あんなやつに返す必要はなかったんじゃない」などのコタの発言から考える。
- 10 「にえきらない」とは「態度がはつきりしない」「ぐずぐずしている」などの意味。「ちゃんと返さなきゃ。じゃなきゃ……」で風馬の言葉がとぎれてしまっているのに「にえきらない」ということである。ただしコタにとってみれば「あんなやつに返す必要はない」と思っていた人間に返さなければならぬのはなぜか、という疑問が晴れないということも含めて「にえきらない（すつきりしない）結末」になっているということであるから、その要素も含めておくことよいだろう。